

【書評】

渡辺好之著『子育て、原点からの出発：楽しさの中に厳しさのある教育の追求-41年間の軌跡より-』

この本は、渡辺好之先生が、1966年に北海道根室管内の別海町上風連中学校の教諭に就任されて以降、教頭、校長を歴任され、2006年に根室市の教育長を退職されるまでの41年に及ぶ教員生活の軌跡を具体的なエピソードを取り上げつつ、当時の資料と合わせて刊行したものです。題名にもなっているとおり、この本では、教師になることの楽しさと生徒に真剣に向き合う厳しさが具体的なエピソードを通して描かれています。

内容を紹介してしまうと、来年以降の履修者がレポートで取り上げたいと思った部分を先取りしてしまうことになるので、詳細は省略させてもらうことにします。概要を述べると、「教育に関する15の提言」に始まり、「教育実践10か条と生徒との交換ノート」、「いじめをなくすための発達課題研究」のほか、校長になってから教職員を啓蒙し、保護者地域とのコミュニケーションをとるための「校長だより」の記録からなっています。自分が教員に向いているかどうか迷ったとき、教育実習にいく前に必ずもう一度目を通してみてください。渡辺先生のエネルギーあふれる活動の記録を読むことで、きっと、その教師像を自分の内面に取り込むことができると思います。

私事になりますが、私板垣は北海道の別海町中西別中学校に入学してから3年間担任であった渡辺先生の指導を受けました。当時を思い出すと、渡辺先生は生徒と一緒にいるのが好きな先生でした。生徒に対しては厳しくとも威圧的でなく、優しくともだらけず、生徒の気持ちを汲み取り、適切な言葉で補い、生徒皆に平等に接し、他の生徒と比較せず、生徒との向き合い方が本当に澄み渡っていたように思います。

昔を振り返って、改めて専門的な視点から感銘を受けたのは、渡辺先生が生徒一人一人、そして、集団に対しても、常に「対話」を心がけていた点です。先生は、いつも生徒一人一人の視点に立って状況を理解しようとし、生徒に確認しながら言葉を選んで言語化し、先生ご自身の考え方との違いをオープンな会話の中で進めていました。周囲に生徒である自分たちがどのように映っているかを見せてくれるこのような「対話」は、生徒の意識的な自己理解をおおいに促すものでした。私が教育心理学を講義する中でイメージしている理想の教師像には、渡辺先生のこのような姿勢が大きく重なっています。

2008年の刊行時に著者の渡辺先生からこの本を寄贈していただき、教師としての心構えを知る実践書として、多くの教職履修生と共に読み継いできました。長年、教育心理学の指定図書とし、半期2~30名が手に取ってきたこともあり、表紙も相当くたびれてしまいました。もう手には入らない本ということもあり、今年度は指定図書から外してしまいました。渡辺先生にその様子をお伝えしたところ、ご好意により教職履修者のために新たに7冊をご寄贈いただくことになりました。こうした経緯もあり、来年度はこの本を教育心理学の指定図書に戻しますので、大切に読んでください。

最後になりましたが、ご寄贈いただいた渡辺好之先生、本当にありがとうございます。ここに記してお礼申し上げます。

(教育心理学担当・板垣文彦)